



Title	懷徳堂記念事業の新たな発展を期して
Author(s)	堀田, 庄三
Citation	懷徳. 1982, 51, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90596
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷徳堂記念事業の新たな発展を期して

懷徳堂記念会理事 長

堀 田 庄 三



このたび、装いを新たにしてお誌の編集を進めることになりましたので、この際、一言御挨拶申し上げることといたします。

御承知のように懷徳堂は、江戸時代の享保九年（一七二四年）に、大阪の五人の町人、いわゆる五同志によって開かれた学校であります。翌々年、江戸の昌平黉につぐ幕府官許の学問所となりますが、実質的にはあくまで大阪の町人の学塾として運営されてゆき、江戸時代後半期一四四年の永きにわたって異彩を放っていたのであります。明治二年（一八六九年）、時代の波に押し流されて閉鎖のやむなきに至りましたが、この間、大阪の町人学者として富永仲基や山片蟠桃らを輩出したことは、よく知られております。大阪府がこのたび国際文化賞として、「山片蟠桃賞」を設けたということも、まことに当を得たことと存じます。

明治年間四十四年の中断はありましたが、明治末年には再建の議が起こり、大正二年（一九一三年）、懷徳堂記念会が設立され、同五年重建懷徳堂の建立を見、多くの市民の期待にこたえて学塾の活動が再開されたのであります。その後の懷徳堂の教学・出版などの事業は順調に発展してきていたのでありますが、残念ながら第二次大戦の末期、昭和二十年（一九四五年）三月の空襲によって、書庫以外の講堂・事務所は焼失してしまいました。

しかし、懷徳堂の教学は新しい形で引き継がれていたのであります。昭和二十三年九月に大阪大

学に法文学部が置かれ、翌二十四年に文学部が独立したのを機に、同年十二月、懷徳堂藏書三万六千冊を、挙げて大阪大学に寄贈し、「懷徳堂文庫」として永く後世に伝えることとなりました。そして、以後、本会と大阪大学文学部は事業を共同で行うこととなったのであります。春秋二季に一週間ずつ開催される懷徳堂講座は、今秋で通算六十五回にもなりました。

昭和四十五年（一九七〇年）理事長に就任しましてから、私は、財団法人懷徳堂記念会の基本財産の拡充に努めました。爾来十数年、今日では再び新たな発展を計るべき時期が来ていると思うのであります。現在のわれわれの社会には、国内的にも国際的にも、多様な価値観が混在しており、単に古いものを受け継ぐだけでは、伝統の中に創造を計ることはできないからであります。懷徳堂は儒学を教学の基本としていましたが、それは当時の最高水準の、しかも諸学の基礎たる学問であったからであり、事実、広く諸分野の人々がここで学び、ここから巣立っていったと聞いております。

現今、市民のための各種学校は沢山ありますけれども、この伝統と水準を誇りうる教学の場は少ないと思います。近く懷徳堂記念会の後援会とも言うべき「懷徳堂・友の会」（仮称）が設立され、懷徳堂の精神を大いに顕彰し、後世へと伝えていく任を果たすべく活動することが期されていることは、まことに喜ばしいことです。当記念会理事会も、この時に当たり、懷徳堂への支持を広く世に訴えるため、長年、堂友会の編集によっていた本誌を、記念会が編集発行することと決定いたしました。大正十三年七月の創刊以来五十号まで、戦前戦後を通じて編集の労を担い守り続けてこられた堂友会諸氏に、誌面をかりて感謝の意を表したいと思ひます。

これらの新規計画は、いわば江湖の理解と支持を願う微意によるものではありませんが、一方では將來ぜひとも懷徳堂の建物そのものの再建を計りたいという願望のあらわれであります。古いものの遺物としての意味も大切であります。古くて新しい学塾という精神のもと、大阪文化のため、ひいては日本文化のために、いささかなりとも寄与するところあらんことを切に願うものであります。

本誌がその一翼を担うすぐれた内容・体裁を持つて、一層世に迎えられんことを期待して、御挨拶とする次第であります。

昭和五十七年十二月一日